

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：34514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02868

研究課題名(和文) 幼児の言葉による伝え合いが活性化する保育活動案の実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Childcare Activity Proposals that Activate Young Children's Verbal Communication

研究代表者

高橋 一夫 (Takahashi, Kazuo)

神戸親和女子大学・教育学部・教授

研究者番号：10584170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：幼児期の言葉の獲得は、その子どもの育ちに大きな影響を与える。そのため本研究では、幼児の会話、つまり言葉による伝え合いが活性化する保育活動とはどのようなものなのかを具体的に検討することを目的とした。

これまでの研究知見によって、造形表現活動では幼児の集中力が継続しやすいことが明らかになってきたため、造形表現活動における幼児の発話や会話に注目し分析をおこなった。その結果、特に、素材の魅力が子どもたちの興味関心を惹きつける造形表現活動において、幼児の会話が活性化することが理解できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児の言葉による伝え合いが活性化する保育活動案として造形表現活動に注目し、幼児にとって素材に魅力があるスライム遊び、トイレットペーパー遊び、段ボール遊び、木切れ遊びを実証実験で取り上げ実践した。それぞれの活動において、幼児の集中力は継続し、各年齢段階に応じた発話が生まれていた。さらにその発話は、活動を通して幼児と保育者、または幼児同士で会話へと発展することが分かった。つまり、造形表現活動は幼児の言葉による伝え合いを活性することができる側面があり、就学期に必要な不可欠となる言葉の力の基礎基本を獲得することができる、より良い機会となることが理解できた。以上が、本研究の学術的意義・社会的意義である。

研究成果の概要(英文)：The acquisition of language in early childhood has a significant impact on a child's development. Therefore, the purpose of this study was to examine the specific types of childcare activities that activate infant conversation, or verbal communication.

Since previous research has shown that young children tend to maintain their concentration during expressive modeling activities, we conducted an analysis focusing on young children's speech and conversation during expressive modeling activities. As a result, it was understood that children's conversation is activated especially in the plastic arts activities where the attractiveness of the materials attracts their interest.

研究分野：教育学

キーワード：言葉 幼児 発話 会話 造形表現活動

1．研究開始当初の背景

高度情報化が進展する現代社会においては、蓄積された膨大な情報を活用し、複雑化した様々な課題を解決に導くことが強く求められている。また、現代社会の抱える多くの課題は一部の間だけでの解決が難しく、様々な人々の対話から生み出される協働こそが鍵となっている。

そのような社会状況を反映し、学校教育においても言葉による伝え合いが重視されており、小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）の国語科の目標においても「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」とあり、解説においても「対話的な学び」「言語活動」「言語能力」「言語感覚」といったキーワードが散見される。

また同様に、保育・幼児教育においても言葉による伝え合いが注目されており、平成 29 年度告示の『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「言葉による伝え合いを楽しむことができる幼児の姿」という文言が明示されている。

特に、乳幼児期の子ども達は、その後の自らの人生を豊かにすることができる認知能力と非認知能力をバランスよく獲得することができる時期にある。そして、獲得された力は、小学校就学以降の学校教育での学びの大切な基礎となる。したがって、保育現場における乳幼児期の子ども達の生活のあり様が、これまで以上に注目されており、子ども達の力をよりよく伸ばすためにも丁寧な保育活動案の設計が不可欠となる。

そこで、本研究では、小学校以降の学びを最大限に活かすことのできる保育活動案について、現代社会の課題解決に必要な対話の力を養う「言葉に関わる活動」に注目し、言葉による伝え合いを楽しむことができる幼児を育てるための具体的な保育活動案の構築を目指すこととした。以上が、研究開始当初の背景である。

2．研究の目的

幼児は様々な活動を通して表現することを楽しむ。一人で表現することもあれば、他者と協働して表現することもある。特に、他者と協働する場合には言葉を用いるが、その幼児同士の伝え合いは、就学期以降に必要な不可欠とされるコミュニケーション力の基礎となる。

一方、保幼小の連携という視点からも、保育現場では幼児同士の会話を豊かにする仕組みを有した保育活動の設計が求められている。

そこで本研究では、幼児の表現活動において幼児同士の話し合いが誘発される過程を分析し、コミュニケーションが活性化する仕組みを取り入れた保育活動案を提案することを目指す。最終的には、保育現場で活躍する保育者が、実際に活用できる保育活動案として還元することを目指す。

3．研究の方法

これまでに申請者らがおこなった先行研究によって、言語表現活動と造形表現活動を組み合わせた保育活動によって、子ども達の集中力が高まることがわかっている。また、造形表現活動中に、幼児の発話が数多く生まれ、幼児同士の会話に発展することも確認できている。

そこで、先行研究でおこなった保育活動をもとに、様々な造形表現活動を設計し、その活動中の幼児の発話や会話を動画によって記録する。収集されたデータの分析視点は、幼児の発話が生まれる契機や、会話に発展する行動がどのような所に存在するのか、である。そして、どのような造形表現活動の在り方が、幼児の言葉によるコミュニケーション能力を育むのかを測定する。

4．研究成果

本研究において、具体的に提案した造形表現活動は、「スライム遊び」「トイレットペーパー遊び」「段ボール遊び」「木切れ遊び」である。また、それぞれの活動は、満三歳児から年長児までを対象にし、コロナ禍における保育現場で実践が可能な範囲で実施した。

いずれの活動においても、用いられる素材自体が幼児にとって非常に魅力的であり、そのことが活動への集中力を高めることが理解できた。そして、素材に触れる喜びが歓声などとなり、発話の契機になっていることが分かった。

さらにその発話は、素材に触れた際の気持ちを保育者に対して伝えるという形で会話に発展することが窺えた。その際、低年齢の幼児であれば単語だけの表出が多くなるが、それを保育者が適切に受け止め、言葉を返すことで会話へと発展する契機が生まれていた。

同様に、活動を近くでおこなう幼児同士が発話をし合い、会話に発展する場合もあった。ただし、幼児の発達側面からも、満三歳児では幼児同士の会話はそれほど長続きせず、年長児に近づくほど幼児同士の会話が進展する傾向が窺えた。また、幼児の協同場面に注目した無藤(1997)が指摘するように、協同の活動は知覚的なものと動作的なものがあるため、発話として表現されないことや、発話されてもその意味が理解できない場合もあり、会話として十分に発展しないこともあった。

それでも、スライムやトイレットペーパー、段ボール、木切れといった造形表現活動で利用する素材の魅力は強く、幼児の言葉を生み出す力が十分にあったと指摘できる。加えて、今回の実証実験では幼児たちが十分に活動に専念できる量を用意していたことも、幼児の発話や会話を生み出す要因になったと言える。

例えば、木切れを利用した活動では、一般的には集める・並べる・積み上げる・見立てる、といった幼児の行動が想定される。しかし、今回の実証実験では非常に多量の木切れを用意したことから、木切れの山に登る・寝そべる、といった身体全体を使った関わり方をした幼児の姿が確認できた。特に、満3歳児では木切れの山のなかで、まるで泳ぐように体を動かしていた姿もあった。また、不定形の木切れを利用したため、木切れに触る際の歓声や、自らが見つけた木片の特徴を保育者に伝えに行く幼児の姿が多く、場面で確認できた。つまり、喜びや嬉しさといった感情が発話の原動力となり、発話が生み出され会話へと繋がったと言える。

一方で、年中児や年長児では、木切れを集める・並べる・積み上げる・組み立てるといった活動も幼児同士で行う場合が多く、発話だけに留まらず会話に進展していた。特に、年中児・年長児の実証実験では、活動の発展性を考え、活動の後半にチューブ式の多用途水性接着剤を用意したことから、幼児同士が協同して接着剤を利用したため、自ずと幼児同士の会話が数多く生み出されていた。

また、段ボールを利用した活動では、年長児を対象に段ボール迷路を作り上げる実践をおこなったが、ここでは、幼児たちの自発的・自主的な行動が数多く確認された。グループに分かれ段ボールを運ぶ、段ボールのユニットを接続する際には、幼児同士の会話が見られ、それぞれの意見を伝え合う姿があった。また、気づいた点や確認すべき点を保育者に伝えている姿も数多く見られた。さらに、最終的に完成した段ボール迷路で遊ぶ際には、個々人の逸る気持ちを抑え、列を乱すことなくスタートの入口に順番に並ぶ必要があると友達を諭す姿もあった。

幼児たちの興味関心を強く惹く活動であるからこそ、幼児たちがそれぞれの思いを他者に言葉として伝えることができている。また、幼児期における子どもたちが自発的に考えることができる契機を含む活動こそが、就学期にも活かすことができる言葉の側面における力を養成することに繋がると指摘できる。つまり、幼児の興味関心を惹きつける素材を利用するだけでなく、幼児の発達に合わせ、協同の活動が生み出されるように活動が進展する流れを考慮した保育活

動案の設計こそが、求められているのだと言える。

幼児期から就学期への移行を考えた場合には、その接続期に生じる課題も存在しており、そのひとつには、広く認知されている「小1プロブレム」が挙げられる。この課題を議論する際に、就学期への円滑な移行を実現するには、幼児たちにどのようにして就学期に見合った力を獲得させるのか、という視点で検討されることがある。つまりは、就学期の児童として適切な振る舞いができるようにするための能力を、幼児期に身につけさせよ、ということである。

しかし、幼児期は就学期の準備期間としてだけ機能している訳ではない。幼児は生活と遊びのなかで多岐に亘る力を獲得している存在でもある。日本の民俗学の礎を築いたとされる柳田國男は、『小さき者の声』という著作の昭和17(1942)の日付が示されている序において、当時の小学校教諭に向けての文章であり、「私の趣旨とするところは、こどもが持って生れ、または携えて学校にはいってくるあるものを、もう少したいせつにしなければならぬということにあった」と明記している。

当時の時代背景を考えれば、日本は太平洋戦争に突入し混乱の時期を迎えていたため、一般的には子どもたちの教育については教化の側面が強調されていたと想像される。

しかし、上述の一文は、その様な時代背景にも関わらず、小学校教諭に向けて幼児たちを大切に迎えて欲しいという、当時の大人の多くには理解が難しいと考えられる革新的な子どもの見立てを行っている内容と言える。就学期に教化を施せと伝えるのではなく、幼児自身が幼児期に獲得した力を理解し、伸ばすことに主眼を置いていると理解ができる。

現在の日本の保育・幼児教育が目指す視点も同様であると言える。そのためにも、幼児期の子どもたちが生活や遊びのなかで、就学期以降も活かすことができる力を獲得することができるような保育活動案を設計することが重要になるが、言葉の側面において、造形表現活動がひとつの鍵を握っていることを本研究では示すことができたと考えている。

<引用文献・参考文献>

柳田國男『小さき者の声』角川書店、1960、 p.3

無藤隆『協同するからだとはことば - 幼児の相互交渉の質的分析』金子書房、1997

高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也「幼児同士の会話が生み出される保育活動 - 子どもたちが自発的に考えることができる契機を含む活動とは - 『神戸親和女子大学 児童教育学研究』第41号、pp.71-80、2022

高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也「子どもを惹きつける素材を使った保育活動 - 幼児の発達の違いによる言動の特徴に注目して - 『神戸親和女子大学 児童教育学研究』第42号、pp.103-116、2023

高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也「幼児の言葉による伝え合いが活性化する保育活動案の実証的研究」研究成果報告書、2023

高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也「素材の魅力が溢れる保育活動 造形表現活動を通して子どもたちの言葉が紡がれる」研究成果パンフレット、2023

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也	4. 巻 41
2. 論文標題 幼児同士の会話が生み出される保育活動 - 子どもたちが自発的に考えることができる契機を含む活動とは -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸親和女子大学児童教育学研究	6. 最初と最後の頁 71、80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白波瀬達也	4. 巻 3
2. 論文標題 伝え合いがもたらす幼児の造形表現に関する研究 - つくりだす場の共有に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪成蹊教職研究	6. 最初と最後の頁 43、50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也	4. 巻 40
2. 論文標題 活動時の位置による幼児同士の発話の相違 - 就学期への円滑な移行を支える新しい生活様式下の保育活動の視点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸親和女子大学 児童教育学研究	6. 最初と最後の頁 101、111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋一夫、須増啓之
2. 発表標題 造形表現活動の発展に伴う幼児の発話の変化について
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋一夫
2. 発表標題 造形表現活動時における幼児の発話について - 満三歳児クラスでの活動に注目して -
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白波瀬達也
2. 発表標題 幼児の素話による粘土の造形表現－伝え合いがもたらす造形活動に注目して－
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋一夫
2. 発表標題 保育活動における幼児の言葉による伝え合い - 幼児同士の位置関係による発話の相違 -
3. 学会等名 関西教育学会 第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋一夫
2. 発表標題 幼児の発話を生み出す保育活動の枠組み - 描画活動時の幼児同士の位置関係に注目して -
3. 学会等名 日本教師教育学会 第30回研究大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究で提案した保育活動について、その利点などを保育現場へ還元するために「研究報告書」（65ページ）と「パンフレット」（見開きA3サイズ、両面カラー印刷）を作成した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須増 啓之 (Sumasu Hiroyuki) (10869712)	神戸親和女子大学・教育学部・講師 (34514)	
研究分担者	白波瀬 達也 (Shirahase Tatsuya) (90512385)	大阪成蹊大学・教育学部・准教授 (34437)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------